

21世紀に生きる子どもたちと学ぶ「アジアの中の日本」

—中高一貫の新しい社会科・地歴公民教育を創造する中で—

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

小沢富士男・大野 新・小林 汎・篠塚明彦

丸浜 昭・宮崎 章・吉田俊弘

21世紀に生きる子どもたちと学ぶ「アジアの中の日本」

—中高一貫の新しい社会科・地歴公民教育を創造する中で—

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科
小沢富士男・大野 新・小林 汎
篠塚明彦・丸浜 昭・宮崎 章
吉田俊弘

2001年、ついに21世紀の幕が明けた。この21世紀最初の年は、アジアと日本の関係を問い直す様々な問題を提起することとなった。昨年来話題となり、様々な問題を引き起こすことになった扶桑社版『新しい歴史教科書』をめぐる問題は、近隣アジア諸国、とりわけ韓国や中国でも大きな注目を集めた。この教科書の登場は、単にこの教科書自身の問題性のみならず、日本における教科書のあり方が近隣の諸外国で問い直されることともなった。そこから見てきたものは、依然として歴史をめぐる認識のずれが横たわっていることであつた。さらに、8月には、小泉首相が靖国神社を参拝するということをめぐって問題がおこった。結局、小泉首相は近隣諸国の方々の感情も考慮し、日にちをずらして参拝を行うという形でこの問題に決着をつけようとした。しかし、本質的な問題は何も解決されないままである。そして、夏休みが明けて間もない9月11日には、アメリカで同時多発テロ事件がおこり、世界貿易センタービルが崩れ落ちるとい信じ難い光景をわれわれは目にすることになった。このテロ事件は、まもなく日本やアジア諸国も巻き込んでいくこととなった。アメリカによるアフガニスタンへの報復攻撃にともない、日本では自衛隊の派遣をめぐる議論が巻き起こった。結局、テロ対策の名のもと、ついに自衛隊の海外派遣は実現することとなった。

こうして振り返ってみると、2001年は激動の21世紀を予感させる年となった。そしてまた、20世紀に存在していた、日本とアジア諸国とをめぐる課題が、21世紀にも引き継がれてしまったことを露呈する一年でもあつた。21世紀を迎えた今、日本はアジアの諸国とどのような関係を築き上げていくことができるのか、われわれの背負った課題はいまだおおきなものである。

上記のテーマを掲げた社会科の研究プロジェクトも本年で4年目をむかえる。ここまで、各教科における様々な実践を通して、アジア諸国と日本との関係を探ってきた。本年もこうした実践面の成果と課題を検証するために、本紀要においては、中学3年生のテーマ学習「日本人の戦争観を考える」で行われてきた授業実践を紹介することとする。テーマ学習は、一般の授業とは異なる少人数学習であり、そこからは従来とはまた異なった成果や課題が見出されるものとおもわれる。

さて、2002年度からは新カリキュラムが実施される。それに伴ない、本校における中高6年間の社会科カリキュラムも大幅な見直しが迫られている。そこで、本プロジェクト研究の最終年となる来年度に向けては、「アジアの中の日本」を位置づけた6カ年の社会科カリキュラムが提言できるよう検討を進めている。

実践報告：テーマ学習「日本人の戦争観を考える」

—授業を通して、生徒のアジア太平洋戦争認識・アジア認識を考える—

社会科 篠塚明彦

2001 年度前期の中学3年生テーマ学習において、「日本人の戦争観を考える」をテーマに掲げて授業に取り組んだ。この問題の中心にあるものは、日本人のアジア太平洋戦争認識に関わるものである。しかし、それは同時に生徒たちのアジア認識とも不可分の関係にあるものである。アジア太平洋戦争はその呼称が示すと通り、アジアおよび太平洋を舞台に展開された戦争であり、この戦争をどのように整理し、どのように捉えるのかということは、すなわちアジアと日本との関係をどのように考えているのかという点と大いに結びついている。そこで、この実践を通して、現在の中学生在がもっているアジア認識、さらには「アジアの中の日本」という問題について考えていきたい。

1. 実践の概要

1 テーマ設定のねらいと目標

昨年来、扶桑社刊『新しい歴史教科書』は、日本のみならず、近隣のアジア諸国でも注目を集め大きな問題となった。この教科書の問題とリンクして、日本の行った戦争をどうとらえるかが一つの大きな争点となった。アジア太平洋戦争が終わってから半世紀をこえているのに、日本では、いまだにこの戦争をどのように総括し、とらえるかが大きな社会的課題なのである。そこで、この問題をじっくりと考えてみようということを授業のねらいとした。様々な戦争観に直接ふれ、自分で事実を調べ、確認し、論議し、日本人の中にありがちな曖昧な戦争認識ですませるのではなく、自分なりのしっかりした戦争観をもてるようになることをめざした。

2 授業計画・実施内容

靖国神社に象徴される日本人の戦争観にまずふれ、その「基盤」を検証したり、その戦争観の持つ意味を考えたりしながら批判力を養う。また、戦争体験者の話を聞き、アジア太平洋戦争の実態についての認識を深める。そして最後には、自分でテーマをたて、調べ、レポートを作成する、という流れとした。

なお、授業は土曜日の4時間連続の授業である。また、受講生徒は、中学3年生の選択者25名であり、私

を含め2名の教員（社会科）がチーム・ティーチングの形で進めた。

各回の内容は以下の通りである。

第1回（5月19日）

靖国神社・遊就館見学；感想発表

第2回（6月2日）

映画『プライド』鑑賞；感想発表 疑問点を出し合い学習課題確認

第3回（6月16日）

映画『プライド』の検証：南京大虐殺 インド独立運動 東条英機のこと 『プライド』作成の背景他

第4回（6月30日）

特攻隊経験者信太正道氏の講演と討論 レポートテーマ検討

夏休み

レポート作成の課題

第5回（9月8日）

第1回レポート発表会

*第6回（11月22日）

第2回レポート発表会

（第6回は、放課後を利用して実施）

*第7回（11月30日）

第3回レポート発表会

（第7回は、本校の教育研究会公開授業）

（*印の回は、正規の授業時間外）

3 生徒の活動と反応

- ① 最初の段階では、様々な先入観を持たせず、現在生徒たちが抱いている戦争観を問うために、特定の立場で戦争を描いている靖国神社の遊就館の見学、続いて映画『プライド』の鑑賞を行うこととした。まず、靖国神社の遊就館を見学した後の生徒たちの感想を見てみることにしたい。感想のなかの一部を紹介すると以下のようなものである。

〈靖国神社・遊就館見学後の感想〉

- 生徒A 展示内容は非常に偏っていた。
生徒B 日本を美化するような文章が多く疑問が残る。
生徒C かなり戦争を賛美し、美化しているという雰囲気だった。戦死者を祭る神社なので仕方ないとはいえ、偏りすぎている。
生徒D 総理大臣が靖国神社を参拝するのに反対する人がいるのがよく分かった。上映されているビデオをみてびっくりした。捉え方によっては、太平洋戦争はあそこまで変わってしまうのかと思った。
生徒E 自分が知っている「情報」とは違ったことが書き連ねてあったり、意図的に書かれていなかったりした。
生徒F 展示やビデオが自分が思っている戦争観とだいぶ異なっているのに驚いた。自分の戦争観が少数派なのではないかという感覚を持った。
生徒G 全般的に展示は都合のいいところ、日本軍を称えるようなものしか掲示していないように見受けられた。

以上の感想は全員のものではないが、他の生徒たちのほとんどが同様の感想を残している。このことから、靖国神社の遊就館展示に象徴される戦争観に対して、多くの生徒が「拒否感」を示していたことが読み取れる。

次に、東條英機を主人公とした映画『プライド』を鑑賞した後の生徒たちの感想のいくつかを紹介してみたい。

〈『プライド』鑑賞後の感想〉

なお、先の感想と同じアルファベットで表されているのは、同一の生徒であること示している。

- 生徒A 東條という一人の人間を描いており、興味深かった。

- 生徒B 勝てば官軍で正義となり、敗戦国を裁くのに、矛盾を感じた。責任はほとんど敗戦国にあるものなのか。
生徒C 靖国よりもかなり中立な立場にたっていた。家族と一緒にいる東條の場面があったが、これは印象に残った。東京裁判の不公平、やりかたのまずさをうまく見せてくれたと思う。
生徒D インドの判事が全員無罪と主張したことについて、このビデオを見て一理あると思った。
生徒E 今まで記録でしか知らなかった東條英機の考えや苦しみを感じ取ることができた。
生徒F 東條英機についての印象が大きく変わった。今まではただの戦争屋というイメージがあったが、この映画では祖国を思う人と描かれていたと思う。
生徒G 今まで見た映画の中で一番いい映画だった。この映画を通じて自分の東條英機への評価が上がった。

この他にも、東條に共感を寄せる感想がいくつも見られた。映画『プライド』に対しては、かなりの生徒が、この映画の中に描かれた東條の生き様に共感を寄せることとなった。この反応は、われわれの予想しきれなかったものであり、正直なところ、いささかの戸惑いを感じずにはいられなかった。遊就館の展示を否定的に捉え、中には、アジア諸国への加害の事実にも目を向けていた生徒たちが、東條英機には共感を示し、東條たちがアジア諸国に対して何をしてきたのかといった視点がすっかり抜け落ちてしまった。この映画の鑑賞は、生徒たちのなかにある戦争認識やアジア認識が大きく揺れ動きやすいものであることを示すことになった。

その後、第3回目の授業では様々な資料などをもとに歴史的事実の確認を進めた。東條たちがどのような意図を持って戦争を推し進めたのか、南京大虐殺がどのようなものであったのか、バル判事はどのような立場で何を考えていたのか、他の判事たちはどのような意見をのべたのか、チャンドラ=ボースという人物がインドでどのような存在であったのか、などについて検討した。映画の背後にどのような戦争観があり、どのような意図で製作された映画であるのかを読み取ってもらいたいと思った。しかし、映画の背後の戦争観をつかむことは生徒にとってはそう容易なことではなかったようだ。

② 第4回目は、特攻隊経験者信太さんをお招きしてお話を伺うことにした。信太さんのお話は実体験に基づいたものであり、生徒たちは、より深くアジア太平洋戦争の実像にふれることができたようである。講演後の感想の一部を紹介する。

〈信太講演の感想〉

- 生徒a 戦争参加者の生の「本音」を聞くことができた。当時の人々の考え方や感情は、残っている記録よりも人の生の話のほうが信用できると思った。
- 生徒b 戦争を嫌うというのなら戦争を起こさせない努力をすべきである。戦争がおこったときに逃げ出すのでは、戦争賛成派の人になぜ戦争がいけないかわからせる努力に欠けている。…特攻隊の話では、新鮮な驚きが多かった。今までは特攻隊に行った人は皆死を恐れていないと思っていた。…特攻隊に指名されてうれしくなかったということ、また母親がそれを嫌がったことを知って、いくら戦時下といえども人は人なんだと思った。
- 生徒c 特攻隊に選ばれた人のうちほとんどがそれを名誉とは思っていなかったことを知り驚いた。
- 生徒d 小林よしのりの本には大きな疑問があったがやっと解けた。やはり兵隊といえども死がいやなんだということがよくわかった。
- 生徒e 何のための厭戦か。厭戦気分を広めた結果、侵略を受けて虐殺がおこって死んだらどうするのか。死なないための厭戦ではないのか。…特攻隊の話は、「志願」の実態、特攻隊員の気持ちがわかり、彼らの戦争観を考える上で参考になった。
- 生徒f 信太さんは元特攻隊員なので、戦争を賛美するのかと思っていたら違っていたので驚いた。…どこかの国が攻めてきたら、降伏すればいいといっていたが、間違っているような気がする。
- 生徒g 信太さんの論理は独特のもので興味深かった。国は決して軍備を持つべきでないとしている。だれも日本には攻めてはこないと非常に楽観的だ。
- 生徒h 他の国がもし攻めてきたら降伏するというのはちょっとおかしいと思う。確かに軍隊に一個人でかなうわけがないので降伏するのは場合によってはいいと思う。ただ国として降伏

するのは人質をとったテロに屈服するようなことで相手を増長させるだけだと思う。

生徒i 信太さんのお話しにはだいたい納得できたし、自分も厭戦思想には賛成だ。

以上のとおり、信太さんの体験談は生徒たちに大きな影響を与えていたことがわかる。

その一方で、討論では、アジア太平洋戦争をとらえることが現代の認識とどう結びつくか、生徒と信太さんの間でギャップがあった。信太さんの考え方に共感を示すものもなかにはいたが、戦争は否定しながらも、信太さんの主張する「厭戦」という考え方に反発する生徒も多く、ここにも生徒たちの戦争認識のゆれを見て取ることができた。

討論の中心は無論戦争であったが、最終的に生徒の論議の方向は、アジア太平洋戦争をどうとらえるかということより、戦争一般のことに向かい、生徒が今考える戦争のイメージをもとにしたものになっていった。日本人の中にあるいくつかのアジア太平洋戦争観を確認し、自分たちの戦争観を自覚することはむずかしい課題であったようだ。

なお、後日、信太さんは一人一人の感想に対しコメントをするという形でお返事を返してくださいました。

③ 夏休みの課題として生徒にはレポートを課した。前回までの議論等を踏まえ、各人がテーマを設定し、自ら調べレポートを作成するというものである。

本来は、夏休みの間にレポートを完成させて、2学期の初めには提出することになっていたが、期限に間に合わないものもあり、そうしたもののなかには9月11日におこったアメリカでの同時多発テロ事件に衝撃を受け、急きよこの問題を交えたレポート内容に変更するものもいた。

生徒のレポートのテーマの一覧は以下に示す通りである。

〈レポート・テーマ一覧〉

- ◇日本人の戦争観—戦争を知る人々から聞く
- ◇「どう思う？」—一般家庭（僕の家の場合）での戦争観
- ◇靖国参拝及びアメリカ同時多発テロ事件に見る日本人の戦争観
- ◇歴史和解に必要なもの
- ◇原爆の今
- ◇台湾に於ける日本人の戦争観について

- ◇日中韓の靖国参拝観の差から見る日本人の戦争観
- ◇新しい歴史教科書とその他の教科書の比較
- ◇戦争ってなんだろう？
- ◇靖国参拝における報道からみる戦争観について
- ◇戦争が社会に与えた影響
- ◇朝鮮人B C級戦犯の戦争観
- ◇戦没者遺族の戦争観
- ◇靖国参拝問題と政党
- ◇靖国神社参拝問題に見る戦争観
- ◇国家・個人・戦争
- ◇歴史的に見た日本戦争論—過去と未来
- ◇教育に見られる日本人の戦争観
- ◇戦前、戦中、戦後で日本人の戦争観はどのように変化したか
- ◇『教科書が教えない歴史』という本から日本人の戦争観を考える
- ◇2つの本を読んで考えた「戦争観」
- ◇博物館にみる日米の戦争観
- ◇天皇の戦争責任を考える
- ◇教科書問題に見る日本人の戦争観
- ◇戦争観—戦争責任に見る戦争観

- ④ テーマ学習のまとめとして、2学期にレポート報告会を行った。毎回、数名の生徒が自らのレポートに基づき報告を行い、他のものが自らの問題意識と照らし合わせながら質疑を重ねるという形で報告会は進めた。

質疑の段階では、比較的活発な意見交換が行われ、それぞれが自らの認識を深める上で役に立っていたようである。

4 実践の評価

生徒たちは、中学1年生・2年生のときの歴史学習で一定の戦争認識やアジア認識をもっていたはずである。しかし、このテーマ学習を通じて、生徒たちのなかにあるそれらの認識が、まだ自分なりのものとなって消化されておらず、様々な契機で大きく揺れ動きやすい可能性を持ったものであることが見えてきた。ただし、中学3年生という発達段階を考慮するならば、そうした揺れは当然のことといえるのかもしれない。

全般に生徒たちは、このテーマに強い関心を持ち、よく発言をし、夏の課題にも積極的に取り組んできた。レポートの報告会の議論によって、さらに相互に認識を深め合うことができたものと考えられる。ただし、

課題に取り組む前に、「日本人の戦争観」とはどのような問題をもつものであるのか、もうすこし共通の文献などを通じて学ぶという場面を設定するべきであったのかもしれない。また、議論などが戦争一般に及んでしまった。レポートのテーマを見てもわかるとおり、アジア太平洋戦争をどう考えるかということよりも戦争一般を論じることになってしまい、やや問題をつかみきれないものもいた。テーマ自体に「アジア太平洋戦争」と入れなかったためにこうした生徒が出てしまったものと思われる。授業を展開してくるなかで、もう少し焦点を絞るような指導があるいは必要であったといえよう。また、レポートの作成にあたっては、テーマ設定等生徒に任せてしまった点もあり、きめ細かい指導が不足していたことは大きな反省点である。

II. 課題レポートから生徒の認識の深まりを考える

アジア太平洋戦争認識やアジア認識については、まだまだ揺れる部分を持っている生徒たちである。しかし、今回のテーマ学習を通して、その認識を深めることができたものと思われる。報告されたレポートの中から彼らの認識の深まりについて考えてみたい。

レポート 1

この生徒は、自らの戦争観を考えるなかで、多くの人々の声を聞くことを重視している。靖国神社や映画『プライド』の背後にある戦争観を見つめる一方で、信太さんもまた、特攻隊員という、戦時下においても特殊な立場に身を置いていたと分析している。そこで、一般民衆にとっての戦争という観点から戦争観を考え直そうとしている。

聞き取りのなかでは、この生徒は被害と加害という観点にも着目をしている。戦争体験者の単なる被害の体験でなく、被害・加害の捉え方を知ることで、自分の考えを深めようとしている。

また、三人の戦争体験者の方から、「戦争は利益の追求である」という指摘をうけ、次のように述べている。

「僕は経済のことなどよくわからないので、このような考えをしたことは無かったが、言われてみればまさにそのとおりだと思う。少数の人間の利益のための戦争で、多くの人々が苦しむと言うのは非常に理不尽であり、許せないことだ。」この生徒は、戦争というものの本質に触れている。しかも、それは教師から教えられたものでなく自らの聞き取りによって獲得したもの

である。こうして獲得した認識は、確かな戦争観を構築する上で重要な意味を持つものであろう。

レポート2

この生徒も複数の立場からの戦争観を見ることで、自らの戦争観を考え直そうとしている。そのことを、この生徒の場合には、ある種の日本人の戦争観と外国（東南アジア）の立場からの戦争観の比較において行おうとしている。そして、戦争観を形成する上での教科書の役割に気付いている。「教科書って怖いなあと思う。政府はその国の人々を洗脳できるのだ。戦時中の教科書を読んだが、真実味があり、もしその教科書でしか、戦争を知ることができなかったとしたら、間違いなく信じてしまうだろう。」という発言は、まさに教科書の重要性を指摘している。さらに、ドイツとポーランドの共通教科書の話しに言及し、「日本も韓国あたりといっしょに教科書を作ってみたら面白いのではないか。」と述べている。ここには、日本が、アジア諸国との間にある歴史認識のずれを乗り越えて、友好関係を築いていくための手段を、自分なりに考えようとしている姿勢が読み取れる。

レポート3

この生徒のレポートは、内容的にはいくつかの本の感想文的な要素をもっていることはいなめない。しか

し、着目したいのはテーマ設定の方向性である。日本が近隣のアジア諸国とのあいだにまだ大きな歴史認識のずれを持っていることを前提として捉え、そのうえでそのずれをいかに埋めていくべきということを中心に検討しようとしている。

それはまた、アジアの中の一員として日本の取るべき方向性を考えようとしているともいえる。日本がアジア諸国と真の和解をするための道筋を考え、現在の段階を冷静に分析しようとしている。

「きちんとした和解を行って『過去を克服』すれば、東アジアの未来は決して暗くはないと僕は信じている。」という言葉には、何やらこちらが勇気付けられる思いである。

以上、三点のレポートについて若干の考察を行い、生徒たちの戦争認識やアジア認識の深まりについて考えてみた。これらのレポートから読み取れるように、テーマ学習を通じて、戦争やアジアと日本のかかわりに関する認識を深めつつある。ここで培われた認識をいかに成長させていくのかという問題は、彼らが高校に進学し、そこで行われる地歴・公民の授業内容と大いに関係する問題であり、われわれに与えられた大きな課題でもある。

・動機

これまで、テーマ学習では靖国に行ったり、信太さんの話を聞いたりなどしてきたが、靖国や映画「ブライド」はやはり偏った見方をしているだろうし、信太さんも特攻兵というある意味特殊な体験をしたことが、あのよう

に戦争体験を伝える事に影響していると思う。このように、いままでの授業で見たり、聞いたりしたことは多かれ少なかれ、特殊な立場や経験に基づくものだ。特殊な意見を知るためには当然基本的な意見を知ることが必要なのではないかな。

といっても、この戦争観というテーマにおいては何が基本なのかというのを勝手に決めることは危険であり、不可能だと思う。そのため、とりあえずと言ったら変だが、一般的な人々、特別な経験をしたわけでもなく、戦争当時普通の暮らしをしていた人々、の戦争観を出来る限り幅広く集めようと思った。

普通の戦争観など知っている、といわれたらそれまでだが、一見知っているようなテーマでも実際に調べてみると、知らずに、勝手に思いこんでいただけということも出てくるだろう。そのようなことを知るためにも、このテーマで調べようと思った。

また、五人の方にお話をうかがったが、一人一人について当時の体験とそれに基づく現在の戦争観に分けて以下に書く。

・高橋栄先生

体験

高橋先生は僕が小学生の時に、すでに退職して普段の授業以外で教わった先生だ。

先生は大田区に住んで、今でいう中学一年の時に終戦になったそうだ。

戦争当時の体験や考えをお聞きしたが、先生は当時、「神風が吹き、日本は勝つ。」と信じていたそうだ。ただ、兵隊や年配の人の中には負けると思っている人もいたらしい。

また、「戦争は良い事だ。」と教わり、将校や元帥になりたかったそうだ。

しかし、靴の革が牛から豚、豚から鮫と代用品に変わっていくなどのことでこのままでは日本は勝てないと思い始めたと言う。中1で敗戦をむかえたが、天皇の放送では何を言っているのか分からず、疎開先にアメリカ兵がきたり、灯火管制が解除されたりしたこと

で、終戦を実感したそうだ。さらに、8/15から大人達が変わったという話が印象的だった。

先生は兄弟の末っ子で兄達は皆戦争に行っていて、敗戦までは先生のお父さんは毎日神棚を拝んでいたそうだ。勇んで送り出したものの、本当は生きて帰ってほしかったということらしい。しかし、敗戦後はそれをぶつくりとやめてしまった。つまり、「もう神など信じない。」ということだそう。

また、大人達は近くの軍事工場から物資を盗むようになり、まさに無政府状態だったらしい。昨日まで戦争戦争といっていた大人達が悪いことををしだし、戦争の勇ましい面ばかりを教えられていたのが負けて裏の面を知ること

で、先生はショックを受け、信じられな

い思いだったそうだ。

戦争観
以上のような体験をして、現在はどうのよう

な戦争観を持っているのかをお聞きした。まず、戦争の被害者、加害者は誰か、と言うことについてうかがった。先生は日本国民全体が加害者だとおっしゃっていた。僕は、悪いのは日本政府だと思っていたが、教育などの問題があったにせよ、国民全体の戦争推進という雰囲気

がなければ、日本が戦争であるような惨事を起こす事はなかっただろうということだ。また、加害者である日本は被害者である中国、朝鮮などに謝罪するべきだが、いまだに日本はきちんと罪を償っていないということもおっしゃっていた。

二度と戦争を起こさないためにはどうするべきかということも質問したが、そのためには、民主制の徹底が必要だとのことだ。民主制といっても政治のような大きなことよりも、むしろ、お年寄りの介護やいじめ問題など一見戦争に関係ないような細かいことを改善し、安心して生活できる世の中を作ることが戦争をなくすことにつながるそうだ。

先生は戦争は人間がやってはいけない最大の犯罪だとおっしゃっていた。利権を追求する事の最たるものが戦争であり、一部の人間にとっては戦争はとても儲かる。そのような一部の人が儲けを生み出すために他の多くの人を犠牲にするという点が、戦争が最大の犯罪である理由であり、このような考え方が先生の戦争観であると思う。

・荒井豊春さん

体験

荒井さんは実際に兵隊として戦地に行った体験をもつ方だ。昭和19年の3月に兵隊になり、11月に東部82部隊から独立歩兵384大隊に移った。はじめは釜山に上陸して、鉄道を使って大原まで行き、そこからは徒歩で山西省に行ったそうだ。また、山西省では国民党と一緒に共産党の軍隊と戦っていたそうだが、国民党が負けて捕虜となり日本に帰ってきたのは戦地に行ってから10年後の29年11月にだったそうだ。やはり、当時

は兵隊になりたかったかということをお聞きしたが、なりたかったのではなく、なるのが義務だったそうだ。また、戦地に行く前は、荒井さんは中島飛行機で働いていて、そのために食糧などの物資は供給されていたそうだが、やはり戦地に行ってから

は現地調達、すなわち略奪で手に入れたということだ。荒井さんに、日本は勝つと思っていたかということも質問したが、他の方々がみんな、勝つと思っていたという答えだったのに対し、

荒井さんは勝つとも負けるとも思っていない、そのうち日本が講和条約などを結んで戦争をやめると思っていたそうだ。要するに、他の方とは違い荒井さんは日本が勝つとは思っていなかったということだ。その理由も、荒井さんが中島飛行機に勤めていたことに有り、当時中島飛行機では、アメリカやイギリスから輸入した部品を用いて飛行機を作っていた

そうだ。これでは、アメリカやイギリスに勝てるわけがないということで、中島飛行機で働く人々の多くは、日本が勝つということに疑問を持っていたそうだ。しかし、当然このようなことは当時は秘密にされていたのだ。

また、荒井さんにお聞きしたところによると、当時でも戦争が良い事だと思っている人はごくわずかで、残りの人は仕方がないと思

っていたらしい。

さらに、終戦の時はどう思ったかという事もお聞きしたが、荒井さんは先に書いたような理由で、日本は勝てないと思っていたとい

うことなので、特別大きなショックは無かったそうだ。

戦争観
まず、はじめに荒井さんは天皇制は無いほ

うが良いとおっしゃっていた。天皇はいくら象徴といっても、国会など政治的な事に関しても、全く関わっていないというわけではないし、そもそも天皇制という仕組み自体が、何らかの意図を持つものによって、非常に操られやすいということをおっしゃっていた。また、これと関係して、十五年戦争の被害者は中国であり、加害者は日本軍であり天皇であるとおっしゃっていた。教育勅語や軍人勅諭にかいてあるように、当時は天皇が軍隊を含めすべてを司っているという事になって

罪するべきであるが、末に「遺憾である」などと言うだけできちんと謝罪をした事はない。さらに、現在の天皇にしても親の罪は関係ないとは言え、代々の天皇家の一員として、天皇家が日本を戦争に導くための大きな役割を果たしたという責任がある。以上が荒井さんの意見だった。

最後に、これから戦争を起こさないようにするにはどうすれば良いかがあったが、現在の日本人にとって一番重要な事は、過去の歴史を学び、戦争がどれだけおろかなことかを知ることだそう。昔は、歴史と言っても神話とごちゃ混ぜであり、多くの人々が真実の歴史を知る事が無かったのだ、あのような戦争につながったということだ。

・貝塚せい子さん

体験

貝塚さんからは、まず戦争の背景となったことがらから教わった。戦争が、はじまる前から、現在の歴史に相当する科目は「国史」といい、ほとんど神話のようなものを教えていた。貝塚さんも、100人以上の歴代天皇の名前を覚えさせられたそう。貝塚さんのお話では、最近の科学的研究によると天皇は朝鮮系の人種であるそうだが、当時の日本政府はそのことが世間に知られる事を恐れ、九州などの天皇に関係のありそうな古墳などは、全て発掘禁止となり。考古学者、歴史学者などはほとんど全て、何も言えなくなっていたということだ。他にも学校では、ABC D包囲網など世界中が日本をつぶそうとしているので、戦わなくてはならないのだと教わったそう。貝塚さんはこのようなことが背景となり、戦争へとつながっていったと、おっしゃっていた。

戦争が始まると、学校の近くに中島飛行機があったため、機械を持ってきて学校が工場になったそう。また、日本の敗戦が近づいてくると、学校にやってきた軍人がアメリカ

兵が本土に上陸したら死ぬと、生徒に青酸カリを配ったこともあるそう。

また、戦争中は日本が勝つと信じていて、負けたら日本人は全員死ぬのだと思っていたそう。しかし、実際に敗戦を迎えると、天皇の放送は何もわからなかったり、灯火管制解除がうれしかったり、負けたということに対するショックはほとんどなく、うれしさのほうが大きかったそう。

貝塚さんはなぜ日本が負けたかという事についても話して下さった。日本は英語もアルファベットも敵性として禁止し、アメリカの文化を全く知ろうとしなかったのに対し、アメリカでは戦前から、日本と戦うことを予測して徹底的に日本文化や日本人の考え方を研究していたらしい。これが、日本とアメリカの大きな違いだそう。

戦争観

貝塚さんにも戦争の被害者、加害者についてお聞きしたが、貝塚さんはそれは分からないとのことだった。十五年戦争に関わった人々のほとんどが被害者の面をもって、空襲を受けた日本国民や、中国、朝鮮の人々は当然であり、例えばA級戦犯だとしても、日本が戦争一色だった時期に非常に責任の重い国の重要な役職についてしまったという点で被害者といえなくもないということだった。このように、戦争においては被害者、加害者というのを定めることは非常に難しいらしい。

また、戦争を防ぐためにどうすれば良いのかということをお聞きしたら、昔のように戦争をすることに文句が言えないような仕組みができてしまうことが、最も恐ろしいそう。このような仕組みができることを防ぐということが戦争防止につながる。しかし、現在の日本人は選挙さえ行かず、それはすなわち、政府のやることをそのまま放っておくことになる。これでは、日本政府が戦争につながる仕組みを作ろうとしても、止められるはずがない。つまり、人々が政治に関心をもち、積

極的に参加することが重要なのだそう。

さらに、現在の日本の学校教育のやり方では、生徒たちが学校で頭を使って考えるということが全然ないそう。頭を使って考えられる人間が減ると、一部のいわゆるエリートに全てまかせっきりになり、政府のおもうつぼだそう。だから、まず教育から変えていなくてはならないとおっしゃっていた。

また、貝塚さんも戦争は利潤の追求の最たるものとおっしゃっていて、真珠湾攻撃について、興味深いことを教えて下さった。戦争が始まる頃のアメリカ政府は、大きな消費がほしかった。それは、資本主義が成り立つためには消費が不可欠だからであり、最も大きな消費が戦争だった。というわけで、アメリカ政府は戦争をしたかったが、国民は戦争などしたくなかった。そこで、政府は日本に真珠湾をわざと攻撃させ、国民の怒りをそったということだそう。アメリカが満洲戦争をやったのもやはり消費を生み出すためであり、これらのことがらから、戦争と利益の追求ということが深く結びついていると教えていただいた。

・石井貞雄さん

体験

苗字は同じだが、特に親戚だったりするわけではない。石井さんは終戦の頃はもう二十歳近かったそうだが、兵隊にはなっていない、ずっと内地にいたそう。他の学生は志願したり、学徒出陣などで兵隊になった者も多く、実際石井さんも甲種合格でいつ赤紙がきてもおかしくなかった。しかし、石井さんは工科の学生だったため、兵役が延期され日立の多賀工専にいったそう。学校でも、本来なら三年分のことを一年で詰め込み、あとは工場で働いていたということだ。他の内地に残っていた方と違い、兵隊になりたい、肩身が狭いなどとはあまり思わなかったそうだが、そのうち必ず徴兵されてしまうだろうとは思っ

ていたそう。

学校が日立ということなので、石井さんは艦砲射撃を受けた体験があるそう。また、日立に移る前は、昭和19年まで東京でくらしていたので、空襲も受けた事がある。さらには電車（汽車）に乗っている時に、機銃掃射を受けたこともあるそう。

また、戦争が続くうちに、日立にB29がきても、日本は迎撃しようとせず、高射砲も全くあたらないというような状況になると、出来れば日本に勝ってほしいという気持ちはあったものの、日本は勝てないと思うようになったそう。しかし、当時は、戦争をやってほしいと思った事はもちろん、やめてほしいと思ったことも特になかったそう。このように石井さんは、日本は勝てないと思っていたので、日本が降伏しても特別何か感じたわけではなかったということだ。

戦争観

石井さんの戦争観で他の方と大きく異なっていたことは、日本国民を被害者と感じていることだった。日本が被害者であるのだから、当然加害者となるのはアメリカである。中国などについてもお聞きしたが、中国と日本は戦争をしていたのだから、被害者も加害者もないということだった。僕が思うに、石井さんは東京大空襲や原爆の体験はないにせよ、空襲、機銃掃射、艦砲射撃という、日本にとっての代表的な被害の面を全て体験している。そのため、日本人は被害者だという意識が強いのではないだろうか。

さらに、アメリカにしろ、日本政府にしろ、絶対的な加害者の立場だとはいえないので、誰かが誰かに戦争の罪を償うというようなことはする必要はないということだった。

なお、石井さんは現在の天皇は政治に口を挟んでいるわけでもないのに、天皇制を変える必要はないとおっしゃっていた。

最後に、戦争を起こさないためにはどうするべきかということをお聞きしたが、人々が

戦争を起こして儲けようなどと考えなくなればよいということだった。最近では韓国の漁船が日本の領海(?)に侵入して、魚をとることがあったが、あのようなことも、日本側にしろ韓国側にしろ、誰かその事件によって利益を得る人物が後ろで操っているかもしれないということもおっしゃっていた。

・渡辺豊さん

体験

渡辺さんは戦争が始まった頃は横浜に住んでいたそう。横浜という街は、当時はおそらく首都圏の海外との交流を一手に担っていて、まれに見る国際的都市だったようだ。そんな街で育ち、家にも外国人がよく来たということで、渡辺さんは当時においては先進的な考えを持っていたようだ。他の人々は、特に開戦直後には、日本は勝つと信じていたようだ。渡辺さんもまた、学校などで戦争は良いことだ、天皇は神だということをおそわっていたそうで、やはり海軍予科にいった友達がうらやましかったらしい。しかし、学校でいくら教わっても日本が勝つということには、当時から心のどこかで疑問を持っていたそう。横浜に住んでいたことで、国力の差をなんとなくではあるが感じていたのではないかとおっしゃっていた。

しかし、戦争が激しくなると下丸子に引越し、工場で海軍陸兵隊の物資などを作らされていたということだ。下丸子は軍需工場が多かったそうで、ずいぶん空襲でやられたということだ。

その後下丸子からも疎開し熊本に行ったが、横浜とは違い、熊本では周りの人みんなが日本は勝つと信じていたようだったとおっしゃっていた。また、熊本では小さな財閥の家に暮らしていたそう。その財閥というのが特攻隊に關係の深い家だったようで、どうも特攻隊の食糧が横流しされていたらしい。戦争で人々が飢えるといっても、飢えの度合いに差

があると、憤慨している様子だった。

また、渡辺さんご自身も特攻隊の方と当時親交があったらしく、特攻隊の人々は無理やり書かされた遺書のように勇ましいことを考えていたのではないということも、実際に教えてくださった。

戦争観

渡辺さんは戦後、新聞記者だったそうでベトナム戦争にも行ったということだ。ベトナム戦争のようなものは国民が国を守るという意志をもって戦ったという点で、やはり日本の侵略戦争とは大きく異なっているようだ。ただ、例え祖国防衛の戦争でも人と人が殺し合うということに変わりはない、本来戦争の被害者であるはずの国民が加害者となってしまふということが戦争の悲惨さの一部をなしているとおっしゃっていた。

また、渡辺さんがおっしゃっていた、別の戦争の悲惨さ、やってはいけない理由が、先に書いた、飢えの差ということだった。国民が苦しんでいるのに一部の権力者がいい思いをしている、この点が許せないのだろう。これも高橋先生、貝塚さんと共通の戦争観だ。

世界各国もこれまで戦争に対して何もなかったわけではなく、国際連盟、国際連合と人類も進歩している。最近も国際刑事裁判所というのができようとしているが、アメリカ、ロシア、日本などの大国と呼ばれる国々が、批准しないのだそう。アメリカ、ロシアが批准しないというのはどこかで聞いたような話だが、日本まで批准しないというのは、一日本国民として疑問だ。もっとも、僕はその国際刑事裁判所というものについて何も知らないが。

今書いたように、国際法や国連などの機関などで戦争がしにくくなっていることも事実だ。しかし、それだけでは不十分であり、世界全体としてだけでなく、それぞれの国が、軍縮、地雷廃止、教育、等の点で戦争根絶にむけて努力することが、戦争をなくすために

必要だというのが、渡辺さんの考えだったようだ。また、その意味で日本の平和憲法というのは非常に重要であり、アメリカからの押し付けなどの理由で軽蔑して廃止すべきではないとおっしゃっていた。これには、僕も多いに賛成だ。

※石井土喜治さん

こちらは真正正銘の僕の祖父だ。※をつけて参考程度としたのは、祖父に聞いた話が体験の面が多く、戦争観が少なかったためだ。ただ、他の方々が東京暮らしであるのに対し、祖父は群馬の山奥なので別の戦争観が見られるのではないかと思います、レポートにのせることにした。

体験

やはり農村なので東京に比べると食料(野菜)には困らなかったようで、東京からはるばるサツマイモやナスを買いに来る人が少なくなかったそう。その際、当時はお金をもっていないも仕方が無いので、着物などと物々交換したということだ。

空襲などは無かったのかと思っていたが、祖父の住む村を直接狙うということはないまでも、高崎や前橋を狙う爆撃機がしょっちゅう飛んできたそう。また、祖父などの人々にとって恐ろしかったのは爆撃機ではなくむしろ人を狙って機銃掃射してくる戦闘機で、祖父も実際に機銃掃射をうけた事があるそう。

また、当時は日本は勝つと信じていて、兵隊になりたかったそうだが、兵隊になりたかったということも、ならないと肩身が狭いというだけのことであり、戦争はやめてほしいと思っていたそう。

戦争観

話を聞くと祖父は今も山本五十六などの人々を尊敬しているらしい。なんでも、祖父の兄が日中戦争の際に北京で戦死した時、当時その部隊を指揮していた、後のA級戦犯で

ある土肥原陸軍大臣が、家にやってきて額に宇まで書いていったということで、とてもありがたいと思っているようだった。

祖父は小泉総理の靖国参拝に対しても、堂々と15日に行けといっていたし、極端な言い方をすれば、右翼なのである。ただ、人間が自分の親族の死を悔やんでくれる人物をありがたいと思い、ましてやその人物が陸軍大臣などであった場合、尊敬の念を感じるのは自然なことであり、激しく非難すべきことではないのではないかと。

日本の戦争責任を認め、当時の戦争責任者を非難することが行われているこの時代に(僕もそれが普通だと思うが)、祖父のような考えをもつ人がいるということは、戦争を知らない現代人が右だ左だということよりも、実際の体験に基づいているという点で重要であり、簡単に片付けてはいけないと思った。

また、祖父は現代の日本の自由主義というものが、自分の行動に責任をとれない人間を生み出し、犯罪などの増加に少なからず影響しているともいっていた。さすがに、戦争当時の教育が良かったとは言っていないが、「昔もいじめはあったが、今のように陰湿ではなかった。」「今と違って、先生に殴られない生徒はいなかったが、殴られた先生ほど良い先生として記憶に残る。」などと、自由主義の問題点を批判していた。このような祖父の考え方は、駒場の「責任に基づく自由」に共通して、興味深かった。

まとめ

以上のように、いろいろな方のお話を聞いてきたが、やはりこれまで僕が考えていた日本人の戦争観とは異なった点が発見できた。多くの方が当時は戦争はよいことだと教わり、そう信じてきたとおっしゃっていたが、かといって、必ずしも戦争に賛成しやっていたとは思っているわけではなかったようだ。僕は戦争がよい事だと教わっていたなら、やって

ほしいと思っていたのかと考えていたが、学校でなんと教わろうが、戦争は悲惨なものだということだろうか。

また、十五年戦争の被害者、加害者という点については、それぞれの方で意見が分かれていた。僕はこれまでの授業などで、加害者であるのは、日本軍と日本政府ではないか、と思っていたが、最も近い考えだったのは荒井さんではないかと思う。荒井さんは、僕がお話を聞いた方の中で、唯一戦地に行った経験のある方であり、実際に食糧などは略奪で手に入れたとおっしゃっていた。おそらくは、日本軍のそのような非道な行為を間近で見たからこそ、日本軍を加害者とする考えがうまれたのではないかと思う。

他の方では、貝塚さんの被害者も加害者も無いというのはひとまずおいておくとすると、高橋先生と、石井さんの考えがある。高橋先生は日本軍、日本政府だけでなく日本国民全員が戦争の加害者だということだった。これも僕が考えるにだが、高橋先生は、荒井さんとは違い内地にいて、戦地での日本軍の行ったことよりも、内地の日本人たちが戦争一色にそまっている姿を見てきたのだと思う。すでに書いたが、戦争中は勇ましいことばかり言っていた大人達が、敗戦になると自分たちのことだけを考えて盗みを働くようになったことなど、内地の日本人の醜い姿が高橋先生は許せなかったのだと思う。このことが、まさにこの戦争観につながっているのだと思う。

石井さんも、高橋先生と同じく内地にいたそうだが、あのように戦争観が正反対なのは、やはり体験の違いだと思う。先にも書いたが、石井さんは日本人の代表的な戦争被害を全て受けていたので、あのような戦争観となったのだろう。日本とアメリカは戦争をしていてアメリカは日本を攻撃していたからアメリカは加害者、日本は被害者。日本と中国は戦争をしていただけお互い様だから被害者も加

害者もないというのは、明らかに矛盾していると思うが、それでも石井さんの場合日本人は加害者ではなく被害者という考えが強いのだと思う。石井さんは自身の艦砲射撃体験を「昭和二十年七月十七日・音と光」というものにまとめていて、僕もそれをいただいたが、このように、戦争の被害の部分に注目して、それを後世に伝えようとしている方なら、このような戦争観をもっているのではないかと思う。実際に聞いた事がないのでよくは分からないが、たとえば広島や長崎で原爆体験を伝えようとしている方々は、同じような戦争観を持っているのかもしれない。

渡辺さんは、直接15年戦争においては、加害者は日本、被害者は中国、朝鮮などということだったと思うが、むしろ15年戦争だけでなく戦争全体についての考えが興味深かった。戦争において、国民は本来被害者であるが、加害者にもなりうる、この点で戦争は悲惨だということだった。

祖父においては、この被害者と加害者という質問はとうとう出来なかったのだ、はっきりとは聞いていないが、話しの感じからさっするに、祖父も石井さんと同じく日本人は被害者だと思っているだろう。しかし、祖父の場合は直接、空襲や艦砲射撃などの被害を受けたわけではないので、祖父の戦争観の基になっているのは、山本五十六などへの尊敬であり、さらにもとをたざせば、祖父の兄の戦死ということになろう。実際に兄弟が戦争で死んだという体験が大きい祖父にとっては、日本の加害の面よりは、被害の面が強く感じられるのだろう。

以上のように、被害者、加害者というのがそれぞれの方の戦争観を考えるのに最も便利だと思ったので長く書いたが、基本的には日本人の戦争観としては被害に注目しているか、加害に注目しているかの二つであった。被害派である石井さんは中国は被害者ではないと僕から見たらぎょっとするような事をおし

やっていたが、それでも戦争は二度とあってはならないことだと、なんどもおっしゃっていた。

最後に、高橋先生と貝塚さん、渡辺さんに共通していた、興味深い戦争観について触れるが、三人ともがおっしゃっていたのは、戦争は利益の追求だと言う考え方だった。僕は経済のことなどよくわからないので、このような考え方をしたことは無かったが、言われてみればまさにその通りだと思う。少数の人間の利益のための戦争で、多くの人々が苦しむと言うのは非常に理不尽であり、許せないことだ。このように戦争というのは、その悲惨さだけでなく、その理不尽さにおいてもあってはならないというのが、三人の戦争観の中にあったように思う。

僕は今まで、戦争といえど多くの人が死に、傷つくだけがその悲惨さの原因となっていると思っていた。しかし、今書いた経済的な理不尽さという戦争の悲惨さや、渡辺さんの被害者、加害者という考えによる戦争の悲惨さなどは実際に戦争を体験した方でないといけないだろう。そのような、普通に靖国に行き、昭和館に行き、教室で考えただけでは知ることの出来ない戦争の悲惨さというのを教えていただいたことが非常にありがたいと思う。

最後に

はじめに書いたように、僕はこのレポートを、戦争体験のある方から、当時の体験を聞くことによって、一般の人々の当時の体験をもとにした現在の戦争観を詳しく知り、今までの民衆の戦争観に対する考えでは、不足している部分を補おうと思って書いた、つもりだ。

しかし、何かのことがらをもとに戦争観を読み取るという点にたいし、どうもあまりピンとこないテーマである。ということに気付いた時にはもう後戻りできないところまで

てしまっていたというわけだ。

そのようなわけで、テーマにすぐわないレポートができあがってしまった。しかし、課題として与えられたテーマを考えなければ、十五年戦争について貴重なことを知ることができ、満足できるレポートができたと思う。また、それぞれの方には非常に親切にいただき、資料をいただいたところも少なくない。このことについて深く感謝し、僕がもっとテーマを理解していたらと反省している。

2 つの本を読んで考えた「戦争観」

① 研究目的

東南アジアの教科書に書かれた戦争を知る。また、右翼の人たちの戦争観に付いて理解を深める。

② 本の紹介

- ・ アジアの教科書にかかれた日本の戦争 越田 稊(編、著) 梨の木社(発)
僕たちの教科書に内容が紹介されてある
- ・ 孫たちとの会話 桑木 崇秀 全国戦友会連合会(刊)
靖国神社に置いてあった冊子

③ アジアの教科書にかかれた日本の戦争

東南アジアの教科書の記述は手書きのプリントにまとめた。

筆者の考えは東南アジアの教科書肯定、右翼の人達が言う「自虐史観」であった。東南アジアの教科書の内容は手書きのプリントを読めば分かると思う。東南アジアの教科書で日本がアジアの独立のために貢献したというような記述は一切見られなかった。結果的に独立につながったというものはあったが、むしろイギリスなどの日本がくる前の支配国のほうがまだ良かったとするものの方が多かった。

確かに日本の占領政策は、東南アジアの教科書を真実とするとひどいものである。「ケンベタイ」から「死の鉄道」「皇民化政策」「バナナ紙幣」挙げればきりが無い。シンガポールやインドネシアの教科書にいたっては、「これでもか、これでもか」というかんじに、日本の残虐性、狡猾さがかかれてある。その量は日本語に訳したもので、40ページを超える。日本の教科書(ぼくたちがつかっているもの。全部プリントだから本当は使っていないけど…)の、「第二次世界大戦と日本」という項目は27ページである。しかも、1ページの文字数の比は1:5、いやそれよりもっと離れているかもしれない。同じ中学生用である。ちょっと信じ難い。著者が言っている「つくづく日本の教科書の内容の乏しさを感じる。少なくとも加害をつづった日本の教科書は皆無といっている。」にうなずける。これはオーバーかもしれないが、日本の教科書を開いてみたが、中国や韓国に関することは少し載っているが、東南アジアにいたっては、本文には殆どかかれていなく、コラム(本文じゃないところ)に申し訳程度にあるだけである。

日本がすくなすぎるのか、東南アジアが多すぎるのか、それはわからない。しかし、東南アジアと日本には、少なくとも教科書においては、戦後50年以上経ったいまでも、小学生が見たって十分に理解できるほど、明らかに戦争への意識の差、「戦争観」の違いがあるのである。

この本を読んで思ったのは、教科書というのはそれぞれ政府の立場によって内容が変わってしまうんだ〜ということだ。東南アジアの教科書は、大体根底に流れる戦争観は似ていたが、ある「事件」に関する記述がX国では多かったり、Y国では少なかったり、Z国では無かったりした。部分、部分で違っていた。タイなど日本人は「中立国」と思っている国もあるが、ほとんどは、日本に「侵略」(一応ここでは侵略とさせていただく)された国である。その中にも違いがあるのに、日本の教科書と東南アジアの教科書が同じ内容であるはずが無い。

要するに僕が言いたいのは、「太平洋戦争」(一応ここでは太平洋戦争としていただく)において「真実」というのは無いかもしれないということだ。「侵略」した側、「侵略」を多く受けた側、「侵略」を少し受けた側、関与しなかった側、全ての立場の人が、全て同じ「戦争観」で、全

てにおいて「真実」が一致しているなんてありえないのである。「中立」の考えをしている人なんていないと思う。ぼくは、「かたより」がある色々な「戦争観」を知り、その中で、共感できるものがあつたら、それをどんどん深めていきたい。

教科書って怖いなぁと思う。政府はその国の人々を洗脳できるのだ。戦時中の教科書を読んでみたが、真実味があり、もしその教科書でしか、戦争を知ることができなかったとしたら、間違いなく信じてしまうだろう。都合の良いように歴史を捻じ曲げることができるのだ。それを次世代を担っていく人たちに信じ込ませることができる。こんな恐ろしいものはないと思う。この対策として筆者は、2つの国合同で教科書を作る事業を紹介していた。ドイツとポーランドの取り組みである。ドイツは「加害」国、ポーランドは「被害」国と言われる立場である。ちょうど日本とアジアの国々との関係だ。(反論したい人もいると思うが…)日本も韓国あたりといっしょに教科書を作ってみたら面白いのではないかな。

④ 孫たちとの会話

この本にはかなり衝撃を受けた。あらかじめ予期はしていたが…

内容紹介。次に感想。

- ・ 日本は戦争をしなくなかった。陸海軍は物量が劣るのを知っていた。
- * たしか 軍は戦争をやりがり、 軍は反対したというのは聞いたことがあるが…どちらもやりたがっていなかったとは初耳。
- ・ ハル・ノートは日本の努力を無視。
- * 「努力」というのはなんだ？満州事変や日中戦争のこと？
- ・ (戦犯が靖国に祭られていることに関して) 濡れ衣の場合が多かった。こういう人達こそ、祭らねば。
- * じゃあ本当の「戦犯」はどうするんだ。ちょっとごまかしているような…
- ・ (A級戦犯に関して) あそこまで追い込まれたに日本が選べる道は、そんなに無かった。そんな時に政府の責任者とならねばならなかったという貧乏くじを引いた。
- * 東條らを「正義」とせずに、仕方なかったとしているところが面白い。ただそんな論法を使い出したら、なんでも「仕方ない」になってしまうような気が…
- ・ いまの平和は靖国に祭られている、戦死した人、戦犯として死んだ人、みんなのおかげ。
- * 本当の「戦犯」の人はどうするのかしら。たまたま「貧乏くじ」を引いた人のおかげで平和というはちょっと変ではないか…
- ・ 日本は、東亜の地からヨーロッパを追い払って、平和で豊かな共栄圏ができることを願っていた。それで、大東亜戦争と名づけた。日本は最初から大東亜戦争を戦ったんだ。何も負けたからといって、アメリカの真似をして「太平洋戦争」という必要はない。
- * 大東亜共栄圏は、日本の侵略の口実だったのか、それとも本当に願っていたのか。これがアジアにおける日本の戦争を論ずるときの永遠のテーマなのであろう。
- ・ 「太平洋戦争」という言い方を左翼の人は嫌っているということを初めて知った。
- ・ (日中戦争とハル・ノートに関して) 早く戦争を終結し、親日政権との間に平和な日中関係を気づきたいと願っていた。そこへハル・ノートが突きつけられた。それをのめば、日本人や工場が大混乱。友好的な日中関係を作るためにたくさん日本人の血を流した。そうした中国の日本人や、南京の親日政権を見捨てたら、中国はどうになってしまう。日本の国民感情が許さない。
- * 日本は、中国と友好関係を気づくために戦争をしたといたいらしいが、ちょっと無理があるような気がする。そんな考えをした国が果たして50年以上前にあつたのか？疑問であ

- る。中国人の命をたくさん奪えば、「友好」どころではなくなるはずだ。
- また日本は中国から手を引くことができたのか？今まで考えなかった疑問が生まれた。
- ・東京裁判の判事パール博士も、ハル・ノートを受け取ったらどんな国も立ち上がるだろうと言っている。要するに「自衛戦争」。侵略戦争ではない。侵略とは「正当な理由なくして他国に侵入し、領土、財物を奪いとること」
 - * パール博士の話は始めて知った。「プライド」にこの話は出てきたっけ？
立ち上がらざるをえなかったら「自衛戦争」そういう考え方は初めて聞いた。では、「正当な理由」とは、「立ち上がらざるを得なかった」からなのか。面白い理由である。
日本は東南アジアの領土を「奪った」のではないとしているが、ではいったいどうしたというのか？
 - ・(真珠湾攻撃に関して)ルーズヴェルトは、暗号を解読して、日本の真珠湾攻撃を知っていた。なのに、真珠湾に知らせなかったのは、アメリカは一國主義で、できるならヨーロッパを助けるための戦争をしなかった。そこで、危険が迫ってくことで、国民をその気にさせたかった
 - * 本当ならひどい話である。確かに、パールハーバーを忘れる薬を合言葉にアメリカは太平洋戦争をしたのだ。ありえそうな話である。ただ、そこまで、アメリカは戦争をしたかったのか？ちょっと疑問も感じる。
 - ・マッカーサー元帥も「日本が第二次世界大戦に赴いた目的は、その殆どが安全保障のためであった」を証言している。
 - * 初めて知った。マッカーサーは、東京裁判をどう見ていたのだろうか？
 - ・植民地は崩壊し、アジアの国々は独立した。或意味で、日本が願っていた大東亜共栄圏ができてつづつある。
 - * 最初から植民地の独立が目的だったとしたら評価できる。侵略の結果、期せずとも独立につながったとしたら、恥ずべきことだ。
 - ・アメリカ人もイギリス人もフランス人も、アジアは白人に対して資源を供給すべき国々、白人に隷属すべき国々だと思っていた。
 - * 確かにそういう白人の人はいまもいるともう。ただ、日本も、そういう考えを持っていたのではないと言われても仕方ないのでは？「西洋に追いつき追い越せ」をスローガンに掲げ、富国強兵を進めてきたなかで、アジアを一段低く見る考えは殆どの日本人が持っていたように思う。(今でも根強く残っているのではないか)
 - ・日本側はできるだけ不拡大方針をとった。ところが中国の不法攻撃は繰り返される。
そして、「通州事件」という日本人虐殺事件がおこる。
 - * 日本政府は建前として、不拡大としていたものの、現地の軍部は戦争しようとして躍起になっていたと教わってきた。いったいどっちなのやら…中国の不法攻撃という話も初めて聞いた。本当なのだろうか？
 - ・(通州事件に関して) 中国兵には、時々そういう猟奇的な殺人が集団的に見られようだね。日本の兵隊はそういう殺し方はしない。一刀両断でバサッと斬るとか、銃剣で一突きで殺すとか。その辺が国民性の違いかもしれないね。
 - * この部分は開いた口がふさがらなかった。南京大虐殺を意識しての記述だと思うが、読むにたえない。一刀両断だとか、一突きだとか、そんな武士道精神を強調したいのかなんだか知らないが、わけのわからないことを言われても困る。これは差別的発言としか思えない。
 - ・南京大虐殺について
便衣隊と間違われて殺された人、少しは軍規を乱した日本兵はいたかもしれない。しかし、何もしない市民を津州事件で中国兵がやったような猟奇的な殺人はありえないことだ。日本人

- にはできない話だ。もしそんなことが行われていたら、英米の取材班によって大変なニュースになるはずだ。しかし、当時も後になってからも、そんなニュースは無かった。そんなことを言い出したのは東京裁判から。復習裁判のようなものだから、とにかく日本を悪者にしたかった。アウシュビッツの大虐殺のような理由で裁く材料は内科と探していた。そこに、肉親を殺されたというような話が、針小棒大に脚色されて、南京大虐殺に発展した。
- * 「日本人にはできない話」というのは少し気になった。戦争中という異常な精神状態の中なのだ。100%ありえないと決め付けられないと思う。大体この本の著者は、なにかと、日本人の国民性を持ち出す。そんなのが理由になるわけが無い。殺人罪が、被告の性格が良かったからといって無罪になった話は聞いたことが無い。ただ、ここ以外は、真実だとしたら、なかなか説得力があった。日本の教科書にこんなことは書いてない。参考になった。
 - ・(日露戦争に関して) アジアの国々は独立への自身が沸いた。
 - * これは 授業でもやった。ちなみに東郷平八郎の話も出てきた。ただ、その後アジアの指導者は日本に失望していくという話を書かないところがずるい。都合がいいことばかり書いてるように感じた。
 - ・日本が戦った相手は、英軍や米軍やオランダ軍で、アジアの人たちを相手に戦ったのではない。ただ、戦場がアジアだったために、アジアの人たちにも巻き添えを食った人たちがすくなくらいいた。
 - * じゃあ、今日本において、アメリカが北朝鮮あたりと戦争し出したら、この人は、あきらめるのだろうか。日本のためだとアメリカがいったとしても納得できる人はほとんどいないと思うが…だいたい、日本軍はアジアの人たちとも戦争をしたではないか。
 - ・(インドのナガ族に関して) 彼らは、おじいさんから、日本の兵隊は非常に勇敢で、規律も正しく、イギリス相手によく戦ったと聞いた。負けたが、そのおかげで独立できたと思っている。ナガの新聞では、若者たちが何故日本軍と共にイギリスと戦わなかったと老人たちに抗議したという記事が載った事もある。
 - * インドの中には、多数の民族がいるのだから、日本に賛成する民族がいたとしてもおかしくはない。きっと日本軍の恐怖にあわなったのかもしれない。ただ、ほとんどのインド人は、日本の戦争を評価していないのである。それを、ある一つの民族が日本を評価しているという話だけしか書かないのは都合がよすぎる。
 - ・南機関(ビルマ独立30人の志士に軍事訓練)の鈴木敬司大佐に、独立の最高勲章が贈られた。要するにインドもビルマも日本に感謝しているのだ。またインドネシアでも戦後7人の日本人に、独立の最高勲章が贈られた。インドネシアの人たちは日本の影で独立したとおもっている人がほとんどではないか。華僑側の言い分ばかり聞いてはいけな。
 - * 独立勲章の話は初めて知った。かなりおどろいた。ただ、インドネシアやインド、ビルマの教科書に日本を評価している記述はまったくなかったような気が…政府の都合で、日本を悪者にしたいのかもしれないが、本当に国民は日本を評価しているのだろうか。
 - ・昭和天皇は、自分のみはどうなっても国民を助けてほしいとボツダム宣言を受諾した。そこが日本と外国の違うところ。君民一体の日本ならではのことだ。天皇陛下にとって国民はみんな我が子のさ。
 - * 昭和天皇をどうとらえればいいのか。彼は戦犯だったのだろうか？それともここにあるような、すばらしい人だったのだろうか？

この本を読んで、やはり、靖国などに言っているような学んだ今でも、小学校のころから、「日本はわるいことをした」と学んできた僕は衝撃を受けた。僕は、テーマ学習を受ける前までは、「自虐史観」を普通に信じていたし、戦争肯定=少数派、変人、と思っていた。しかし、靖国やプライドを知り、

丸浜先生も言っていたが、僕は少数派かもしれないと思った。この本にもあるように、日本は中国との友好関係や、アジアの独立に向け努力したが、ついに力及ばず、アメリカに倒されたのかもしれない。僕は、日本の教科書に洗脳されていたかもしれないと思い始めた。そこで、今回は、この本を読むことにした。僕の感想を見れば分かると思うが、やはりどこか抵抗があった。しかし、確かに、こういう戦争観を持っている人はいるのである。詳しく知ることができて本当に良かった。

<資料>東南アジアの教科書

この本は、東南アジアの教科書の紹介、それに関する説明、日本の戦時中の教科書、今の教科書の紹介がされていた。この中で印象的な記述、事項をあげる。

(1) インドネシア

- * シンガポールの人々は日本の支配下で、彼らの生涯のうちもっとも暗い日々をすごした。
- * 「ケンペイタイ」ということばを口にする、人々は心に今日の念が打ちこまれる思いをもつ。
- * タイ・ビルマ間の鉄道の建設、病気と飢えの「死の鉄道」
- * 中国人処罰、中国人への 5000 万ドルの献金要求
- * マレー人やインド人を、ユーラシア人と中国人より優遇
- * 日本軍の食料略奪、「バナナ紙幣」の大量発行（粗悪） 食糧供給不足と闇市
- * 日本・アジアの映画のみ上映可 外国のラジオ禁止
- * MPAJA（抗日グループ） イギリス将校が訓練
- * 日本艦 イギリス艦 ⇨ ヨーロッパ人はアジア人より優れているわけではない
イギリス人への尊敬がなくなる
- * イギリスの準備不足による敗北 ⇨ 国家国民は敵から国を守るために十分な準備が必要
- * 外国支配の排除の必要性を感じる 共産党による支配を望む
- * リー・クワン・ユー（シンガポールの初代首相になる）の言葉

「(略) 日本人でもイギリス人でも、我々を虐待したり酷使したりする権利はないということを決心するようになった。われわれは自らの手で自らをおさめ、そして、われわれの子どもたちを育てていくことが可能であると、心に決めました。そのような国であってこそ、われわれは自尊心ある国民であり得るのです。」

(2) マレーシア

- * 日本が東南アジアへ勢力を拡大した理由は、経済的必要性である。
- * 共栄圏の日本の目的はよいが、しかし実際に日本が望んでいたことは、経済的に支配する帝国を作り上げることだったのだ。
- * 日本の海軍は強い。彼らは「武士道」という規範をもっていた。それは勇気があって、忠実で、苦痛に耐えられ、従順。神風操縦士。
- * 「レパルス号」と「プリンス・オブ・ウェールズ号」を日本が破壊、世界に衝撃
- * 多くのアジア人は日本を解放者だと思った。地元住民の激しい反対なし。進出のあと、約束を守らないのに気付く。
- * 彼らはイギリス人の座を奪ったのだ。日本の支配はイギリスよりひどかった。
- * 評議会 議長は日本人軍政官、他のメンバーは現地人。権力なし。助言を与えるだけ。日本軍は現地の人々が自ら統治することを許しているのを示したかった。
- * スパイ組織 「敵機関」マレー人を逮捕
- * 逮捕された人々を尋問 「憲兵隊」
- * 日本語教育 生活様式 君が代、お辞儀、時刻まで「日本化」
- * 「バナナ紙幣」の発行→インフレーション、「死の鉄路」
- * 「私たちは、日本が自分の利益のためにインド人の魂や感情を利用したことがわかった」
- * 「イギリス支配の方が日本よりもいいと思い始めた。」「生活状態は日本人が約束した豊かさとは異なっていた。」
- * MPAJA = 抗日グループ 中国人中心 マラヤ共産党が指導 イギリスが協力
- * 「日本の技術の結果、国民の考えた変わった。イギリスは日本人に負け馬鹿にされたイギリスの権威はその弱さゆえに、地に落ちた」

他 8 国を紹介していたが、すごい良になってしまうのでここでは省く

歴史和解に必要なもの
(中三夏季課題；「日本人の戦争観」レポート)

0. はじめに

このレポートでは、『歴史和解』というものは一体どういうものか、そして（それが可能であるならば）そのプロセスには一体何が必要で、今何が欠けているか、ということを考えてみたいと思う。これは本来の「日本人の戦争観を考える」というテーマからは外れてしまうかも知れないが、未来志向で物事を考えるにしても和解は常に付きまとう問題であるし、その中でどのような戦争観を持つかは重要な問題であろうと思うのでこのテーマにした。

1. 歴史和解とはなにか

「和解」とは何だろうか。簡単にいえば、「仲直り」である。広辞苑にもそう書いてある。子供が喧嘩をした時、仲直りすればこれからも友だちでいられる。

しかし、「仲直り」といっても今まで対立してきた二者（国間であれ地域間であれエスニック間であれ）がすぐに仲直りできるわけではない。歴史和解というぐらいだから、長年の確執がある。また二者間にあった戦争や虐殺といった出来事はお互いに不信感を抱かせるであろう。そうするとただ単に「仲直り」というだけではない、それに至るまでいくつもの壁があるわけである（そしてまたそれは平和への道でもあるはずだ）。

また虐殺などの被害者と加害者が和解をしようとする時、被害者が復讐をしようものなら和解はさらに遠のいてしまう。復讐のくり返しになってしまう。そこから脱却するには、「歴史の精算」という考えではなく、「歴史を乗り越える」という考えが必要でもあるのだ。

では和解はどういうステップを踏んでいけばいいのだろうか。リチャード・ソロモン米平和研究所所長によると、つぎの4つのステップがあるという。

- 1 真実を明らかにすること
- 2 記憶化・記念化すること
- 3 補償
- 4 責任

以上の4つを順に考えていきたいと思う。

1-1. 真実を明らかにすること

今の日本では、日本やその他の国がアジア太平洋戦争で何をしたのか、という事実を巡る問題が議論されている。たとえば南京大虐殺だとか、従軍慰安婦の問題だとかである。とくに加害側にとっては、自らの加害の事実をなかなか認めたがらないのは仕方のないことである。プライドだけではなく、社会的な影響も大きい為である。両者が共通の事実認識を持てば、そのあとのステップにおいて「何を」記念するのか、「何に対して」補償（謝罪）するのかについてのよけいな混乱は解消されるだろう。

一方で、「唯一の事実はない」ことも事実であるし、それにひとりひとりの歴史観、戦争観があって当然である。議論があって当然である。そのなかで何が事実か、（調査などを経て）共通認識が作り上げられていくことが大事なのである。

ちなみにEUでは共通の教科書づくりがなされたし、最近では日本と韓国の学者グループも同じようなことをしようとしているらしい。決して悪いことではないと僕は思う。

1-2. 記憶化・記念化すること

何がおこったのかが明らかになったら、そこから教訓を学んで記憶しなければならない。日本でも戦時生きていた人たちがどんどん少なくなってきた。今のうちに真実を明らかにしておくことも大事だろうし、それを生かしていく、記憶していくことが重要だと思う。

1-3. 補償

たとえば金銭的な補償である。しかしこれもお互いの「真実」が食い違うようだと意思疎通がうまく行かないだろう。それにこれをしっかりしなければのちに正義が行われたと言われるようにはならない。

1-4. 責任

最後は加害者が責任を果たさなければ成らない。たとえば刑務所にぶち込むとか死刑にするとかである。しかし、そういった懲罰とは対極にある回復的な正義という考え方、つまり加害者側が罪を認めたのなら社会に復帰させ、正義の回復に努力していくという考え方も重要になってくる。なぜなら戦争や虐殺という問題は個人に限定できるものではないため、個人を懲罰し

押さえ込めばよいというものではなくてきている為である。また被害者側が敵意をむき出しに接すると、また復讐のくり返しに陥る危険もある。

和解においてまず大事なことは共通の正しい知識を持つことであろう。事実についての論争がいつまでも続いては其の先のステップに移ることはできないし、その真実はお互いに受け入れなければならないものである（和解したいのであれば）。そのことが、将来「和解において正義が行われた」と自信を持って言えるような和解につながる。

それから被害者側が謝罪を受け入れるという点も大事だろうと思う。加害者側が（おそらく洪々だろうが）事実を認めて責任をはたしたなら、もうそれで敵対的な関係は解消していくように被害者側も努力しなくてはならない。我慢しなくてはいけないかも知れないが、いってみればもう一つ高い次元で接しなくてはいけないのである。これが「過去の克服」である。そういうことが今後の社会を共に作っていく中でいい方に働くことは間違いない。

和解ということは、これから共に力をたずさえて社会をつくって行く為のプロセスだとも言える。和解のあとにわだかまりを残さない為には、あとからでも納得できるようにじっくりと事実を共に確かめていくこと、そして両者が協力して過去の克服に取り組むこと、この二つが大事だろう。

なおこれまで何度も「加害者」「被害者」という言葉を使ってきたが、そう簡単に割り切れるものではない。とくに何世紀にもわたり宗教などにも根ざしているような民族の対立などでは、報復が何度もくり返され、お互いに罪をなすり付け合うということがよく見られる。実際には問題はもっと複雑である。

2. これまでの事例

これまでに幾多ものの戦争や、紛争や、虐殺などがあったが、その”和解”例をこれから見ていきたいと思う。

2-1. 南アフリカ

南アフリカといえばアパルトヘイトが有名である。この大きな問題を克服したのが初の黒人大統領ネルソン・マンデラである（歴史和解においてはこのような強力な政治リーダーシップの存在が重要である）。

南アフリカでは真実和解委員会（TRC）がつけられた。ここでは加害者

が事実を全て告白し悔悟すればケースごとにそれぞれの特赦を認めた。また被害者も体験を話し、それぞれの証言を照らし合わせて、一定の基準にあわせて補償する。またその過程で相互理解を深めていく。これによって回復的な正義を追求していくというものである。

これは加害者の責任の新しい取り方として注目を集めた。ほかのケースでもこの方法が応用できるかも知れないという期待もかかっている。しかしこのケースのように被害者と加害者がハッキリ区別できない場合は難しいかも知れない。

2-2. 南北朝鮮

2000年6月、歴史的な南北首脳会談がひらかれ、和解がスタートした。南はこのケースでの重要なリーダーシップをもつ金大中大統領、北は言わずと知れた金正日国防委員長である。

韓国側は金大中の元、北に対して太陽政策をとってきた。太陽政策とはつまり共産化の統一も南による吸収もなしにして、平和裡に共存していこうというものである。統一を急がず、安心して一緒になるまで待とうという考え方である。

また金大中氏は、両国の共通の敵の存在をてこにして合併したりするのではなく、あくまでも二者に依る自発的な統一を目指している。中東アジアなどで、よく第三国（アメリカなど）が間に入って握手している光景をよく見かけるが、究極的には二者のみで外圧無しでやるべきものではあるだろう。

しかし、このステップに問題がないわけではない。最大の問題点は、そもそも朝鮮戦争など一つの民族を二つにわけたことについて全く棚上げにしたままであることであろう。これによって本当の和解プロセスにはまだ程遠いものとなっている。

北側については、食糧問題が深刻な為少しでも多く援助をとろうという考えであろうという見方が一般的である。また金正日は独裁体制を維持することをつねに頭においているだろう（これはなにも北朝鮮だけの話ではない。中国などでも同じことが言える。つまり国民にある国に対する敵国意識を植え付けることで体制の維持を図るのである）。このためあまり深刻な問題（というより自分達に都合の悪いこと）に立ち入ることは北の態度を硬化させることにつながる。

しかし前に述べたステップに入る前によほど時間がかかるようだと統一はさらに困難を極める。

ちなみに南の中でも金大中の強力なリーダーシップにもかかわらず、北は

朝鮮戦争の責任をとるべきだ、など太陽政策に決して賛成ではない意見も多い。

2-3. ドイツとポーランド

ドイツは第二次世界大戦後、日本と同様に戦争責任を負わされたが、日本と違って周囲の国との和解にある程度成功しているという評価をされることが多い。

ナチスドイツの責任を考える時一つの重要な問題がユダヤ人虐殺である。西ドイツのウィリー・ブランド首相は1970年にポーランドを訪れ、ワルシャワのユダヤ人の礼拝所の前で突如ひざまずいた話は有名である。ブランドは決してナチスに加担した人間ではなかったのだが、それでもドイツの犯罪の責任の一端を担ったのだ。

しかしこの和解プロセスはなかなか進まなかった。それは当時共産国であったポーランドのスターリン主義政権がドイツから受けた被害の事実を政治目的として活用し、ドイツを永遠の敵とすることで民主性のなさを補おうとしていたからであった。ポーランドの教会の司祭たちから和解の申し出があったのだが、共産党にはそのつもりはなかったと言ってよいだろう。

こうした例はたとえば日中の間でも見られるといってもよいだろう。つまり民主主義国家とそうではない国との間で和解をしようというのはとても難しいことなのである。和解の問題を他の政治目的のために利用するということが行われてしまう。

ちなみにこの二国間では、1972年から両国の歴史家があつまって教科書対話が始まり、両国の様々な教科書の中身が点検されていった。またポーランドが自由主義国家になってから、この和解ステップは急速に進んでいった。

3. 我々はどうすべきか

さて、ここで我々の住む日本の問題に立ち返ってみよう。

日本が第二次世界大戦においてアジア各地で行った行為に関して、現在色々な問題が吹き出している。個人補償などはその一例である。また、各国で認識の異なる問題（従軍慰安婦に関して日本政府は最初その存在さえ認めていなかった）があるし、日本政府が「すでに何度も謝った」とか「もう問題はナントカ条約で解決した」と考えている問題に関してアジア各国からはそれが認められていないことも多く、問題がこじれている。そのことで外交がなかなかうまくいっていないことも事実である。

日本がアジア各国と和解をしたかどうかという点に関しても議論があると

ころかもしれないが、そもそも相手国が認めてないのに和解を済ませたなんてことはあるはずがないのである。僕はアジア外交のためにも、日本を含む各国の国民のためにも、日本政府がしっかりと和解にのり出すことが必要であると考えている。

和解は、先に述べたステップを基本としてケースバイケースで手を加えながらすすめていくべきである。具体的には、

○日本政府は、それぞれの国の学者などが参加して「何が事実か」を一つ一つ確かめていくということを各国を行う。公式なものとして事実を認定することで、共通の歴史認識をもつ。このことがお互いが納得できる和解を行う一つの大事な点である。

○過去の条約などをよく吟味した上で、認定した事実にもとづく補償・謝罪を行う。

こういったことをすればよいのではないと思う。

では、我々日本人はどのようにすればよいのだろうか。

なによりも「正確な知識をもとう」という姿勢、そしてその事実を尊重することが大事である。つまり真実を受け入れること。

何が事実なのかについては先述したような公式なものとする（本来は今学校で教わったり政府が見解としていたりすることとしていいのだろうが、正直どちらも頼り無いのである）。これは日本にとって悪いことも認めることとなるため、謙虚な姿勢でないといけないとも言えるだろう。しかし和解するのならばひとも必要なことである。

そして、「和解は未来の社会につながる」ということをわすれないことであろう。何でも罰するのではなく、改めて受け入れることも必要かもしれない。きちんとした和解を行って『過去を克服』すれば、東アジアの未来は決して暗くはないと僕は信じている。

4. おわりに

このレポートを書くにあたって、『日本の戦争責任をどう考えるか』（船橋洋一編著、朝日新聞社）を大いし参考にし、また随所に引用したこと（1、2）を正直に申し上げなければなりません。このレポートはこの本の内容に僕の考えを足したものがベースになっており、この本の読書感想文と言ってもいいくらいです。また3つの演説をおさめた『和解と共存への道』（金大中、岩波ブックレット）を2-2で参考にしました。